

【授業科目】 免疫検査学実習

Practice in Laboratory Immunology

| 担当教員 | 開講年次 | 選択必修 | 単位数 | 時間数 | 授業形態 | 実務経験 | オフィスアワー | 教職員への授業公開 |
|-----------------------------------|---|------|-----|------|------|------|--------------|-----------|
| 星野 真理 | 2年次後期 | 必修 | 1 | 30 | 実習 | なし | 巻末掲載 | 可 |
| 授業概要 (内容と進め方)及び課題に対するフィードバック方法 | <p>授業概要／講義で学んだ免疫検査学を理解するために、被検材料の取り扱い、検査に必要な試薬（抗原・抗体・補体液）と機器、凝集反応の見方について概説後、免疫血清検査の主な手法である凝集反応、凝集抑制試験、沈降反応、溶血反応、酵素標識抗体法を実践する。詳細には、凝集反応は直接凝集反応と間接凝集反応、凝集抑制試験は、ウイルスによる凝集反応を用いた抗ウイルス抗体による抑制反応、溶血反応は、補体価測定を行う。免疫血清反応の特徴について説明することができることを到達目標とし、併せて検査結果の解析と評価結果の報告の仕方を教授する。</p> <p>課題に対するフィードバック方法／提出されたレポートに対して必要に応じてコメントをつけて返却する。課題を課した場合は課題提出後に解答を示し、説明を行う。</p> | | | | | | | |
| 授業の位置づけ | <p>本学のディプロマ・ポリシー①「臨床検査の専門性と責務を自覚するとともに、地域に住むあらゆる健康レベルの人々に専門的知識と技術に基づき臨床検査を実践できる。」の達成に寄与している。</p> | | | | | | | |
| 到達目標 (履修者が到達すべき目標) | <p>① 各種免疫学的反応について特徴を説明できる。 ② 免疫学的検査方法と測定結果の解釈について理解し、基本的な検査技術を習得できる。 ③ 免疫学的検査方法の原理を説明でき、正しい検査・判定ができる。</p> | | | | | | | |
| 時間外学習に必要な学修内容および学習上の助言 | <p>免疫検査学授業の試験管内抗原抗体反応の基礎理論を実践するので、その項目を理解した上で実習に参加することが望ましい。事後：毎回学修したポイントについて、レポートを作成しながら、よく復習をする(2時間程度)</p> <p>※上記時間については、指定された学修課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間（2単位15回科目の場合：予習+復習4時間/1回）（1単位15回科目の場合：予習+復習1時間/1回）（1単位8回科目の場合：予習+復習4時間/1回）を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。</p> | | | | | | | |
| 授業計画 | <p>第1・2回 実習講義（免疫検査の基礎技術）</p> <p>第3・4回 免疫化学的定量法（赤血球凝集反応）</p> <p>第5・6回 間接凝集反応（自己免疫疾患検査）</p> <p>第7・8回 血球凝集抑制試験（1）イムノクロマトグラフィ法（感染症検査）</p> <p>第9・10回 血球凝集抑制試験（2）（感染症検査）</p> <p>第11・12回 血清補体価の測定</p> <p>第13・14回 ゲル内沈降反応</p> <p>第15回 免疫電気泳動法（免疫グロブリン異常症の検査）</p> | | | | | | <p>全て 星野</p> | |
| 評価方法 評価基準 | <p>成績は以下の評点配分によって総合的に判断する。 レポート 30%、学期末試験 70%</p> | | | | | | | |
| 教科書 | プリントを配付します。 | | | 参考書等 | | なし | | |
| 学生へのメッセージ | <p>実習で行う反応原理を理解し、データを正しく判断できるように勉強してください。</p> | | | | | | | |